

## 提 言

## 子どもの最善の利益を守るケアリング環境の創造を

筒井真優美（日本赤十字看護大学 名誉教授）

## 1. 子どもの最善の利益を守る

子どもにかかわる大人は、子どもの最善の利益を守ることが求められています。子どもは認知能力・言語能力・身体能力などが発達途上であり、周りの環境が子どもの成長発達に及ぼす影響が大きいです。子どもの最善の利益を守るためには、子どもを「よく見て、よく聴く」ことによって、子どもが全身で表現していることを捉えることが必要である一方、大人が「子どもと相互作用する環境」である認識が重要になります。



## 2. 心理的安全性

Edmonson (2019) は心理的安全性の高い組織は医療ミスが少なく、起きてしまったミスについて率直に話す頻度が高かったと報告しています。心理的安全性は率直に発言したり、懸念、疑問、アイデアなどを話したりすることによる対人関係のリスクを、人々が安心してとれる環境であり、組織の革新・成長する力につながります。

子どもの最善の利益を守るためには、人々が安心して子どもと家族にかかわれる心理的安全性が必要になります。

## 3. ケアリング環境

Mayeroff (1971) は相手をケアすること、相手の成長を援助することによって、自分もまた自己実現すると述べています。ケアリングによって、子どももケア提供者も癒され、自己実現し、免疫グロブリンの数値が上昇すると報告されています。ただ、ケアリングには、安心して安全な環境、すなわち心理的安全性のある環境が必要になります。

## 4. ケアリング環境創造のために

私たちの一言、かかわりなどすべてが、子どもと家族に影響を与える環境であることを認識することが大切です。子どもが成長発達途上であるので、バイタルサインズの測定、採血などすべてに大人より時間がかかり、子どもへのインフォームド・アセントがその後の子どもの成長発達に関与します。

コロナ禍で、通常とは異なる環境におかれ、多くの人々が疲弊していますので、環境の見直しが必要になり、子どもの最善の利益を守るためには、ケアリング環境の創造が重要になります。

アクションリサーチは人々の課題を、人々のために、人々とともに解決する研究方法です。組織の環境を見直し、課題を改善することを目標とする研究方法です。子どもの最善の利益を守るために、一つの方策として、アクションリサーチを用いて、ケアリング環境創造をすることを提言します。

Edmonson, AC./野津智子訳. 恐れのない組織. 東京：英治出版株式会社, 2021.

Mayeroff, M./田村 真・向野宣之. ケアの本質. 東京：ゆみる出版, 1987.

筒井真優美編. 研究と実践をつなぐアクションリサーチ入門. 神奈川：ライフサポート社, 2021.

筒井真優美. 小児看護におけるケアリングと癒しの環境創造—アクションリサーチを用いて—. 文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書, 2011.

筒井真優美. アクションリサーチの現在. 看護研究 2018；51（4）, 285-301.

筒井真優美編. 看護理論家の業績と理論評価 第2版. 東京：医学書院, 2020.